

体験学習を通して児童間の交流を深めるための 教材作りに関する研究

田 明男

非会員 工修 大阪府大阪市立姫里小学校 教諭(〒555-0025大阪市西淀川区姫里2-8-24)
E-mail:den3200@ybb.ne.jp

近年、生活様式の変化とともに私たちには、家族を含め自分以外の者とのコミュニケーション（交流）を図ることに、様々な課題が見られる。学校生活においては、子どもたちにも学年にかかわらず、「児童の集団（仲間）作りの指導」の難しさを教育指導の課題の一つとしてあげられる。これについて本研究では、4年生と特別支援学級の児童との協力による作物の栽培・収穫・調理等の学習を通して、双方のグループの交流を深めたり、4年生だけでヨシを使った作品作りなどにより、4年生同士も交流を深める事にした。成果については、定期的に児童自身が作成した「交流新聞」や、「交流についての意識調査」により検証を行った。その結果、児童同士の交流を深めるには、継続的な体験学習の積み重ねが教材として有用であること、体験学習には積極的に児童同士の交流を考慮した計画的な教材作りが必要であることなどが明らかになった。

Key Words : *study by nature experience, organization of group in school year, special support class, region and guardian, exchange of children, making exchange newspaper*

1. はじめに

私たちは旧来の村社会を中心とする集団の一員として、農林作業や冠婚葬祭などの自らの生活を互いに支え合うための活動を通して、集団への帰属意識や個人同士の交流の必要性の意義を見い出してきた。しかし、生産性・経済性などの効率を重視する現代社会での企業、労働組合、地域、学校などの組織の一員としての役割分担は、いつのまにかその目的からはずれ、組織が個人を縛る「囲い込み」症候群に陥ると言われている¹⁾。そのため個人の集団への帰属意識の低下と共に、個人同士の交流の必要性の意義が希薄化しつつあると考えられる。

子どもたちには、情報化社会が進む中で写真やテレビなどにより感覚的に学びとる「間接体験」や、コンピューターをはじめとするシミュレーション機器などを通して学ぶ「疑似体験」の機会が増加しつつある。また、都市化や少子化、地域社会における人間関係の希薄化などが進む中で、子どもたちが多くの人や社会、自然などと「直接ふれあう様々な体験」の機会が乏しくなっている。体験活動は、学校、家庭、地域社会を含めた子どもたちの生活全体を通じて重要である²⁾。そのため体験活動を通して子どもたちには「様々な人々との出会い」すなわ

ち「様々な人々とのつながり」の交流が必要であると考えられる。学校教育においては、学校行事では遠足や林間学習や運動会などの種々の体験的な学習が、教科の学習指導の中では、観察や実験、調査、見学などの体験的な学習が行われている。しかしながら、限られた場で、短時間の体験学習に終わっている傾向も見られ、明確なめあてと、長期的な計画による直接体験活動を行うのは困難な状況である。本研究では、4年生における一年間に亘る体験学習を通して、児童自らが様々な人々との出会いにより、児童間の交流を深めることの大切さを理解するための様々な教材の開発と、効果的な活用方法を探るものである。

2. 各種文献・資料に見られる「交流の必要性」

小学校教育での交流の必要性について記載されている状況を、既存の文献・資料を基に以下に示す。

(1)「小学校学習指導要領³⁾」

小学校学習指導要領での「総則 第1. 教育課程編成の一般方針」においては、「道徳教育を進めるに当たっ

ては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深め、(中略)集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して行うこと」が述べられている。また、「総則 第4. 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」においては、「(3)日頃から学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深めること」や、「(12)小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること」のように、個人同士だけではなく集団同士の交流の必要性も述べられている。

さらに各教科においては、国語科では各学年の「1. 目標」において、「話し合う能力を身につけさせる」が、「2. 内容」において、「書いたり読んだりしたものを発表し合う、伝え合うこと」が述べられている。家庭科では5・6年の「1. 目標」において、「(3)自分と家族のかかわりを考えて実践する喜びを味わう」が、また、「2. 内容」において、「(3)家族や近隣の人々とののかかわりについて(後略)」が述べられている。体育科では各学年の「1. 目標」において、「だれとでも仲良く・協力、公正に行う」が、また、「2. 内容の各運動」において、「仲良く助け合って運動する」が述べられている。総合的な学習の時間では「第1. 目標」において、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して(中略)問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」が、また、「第3. 指導計画の作成と内容の扱い」において、「(5)グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって(後略)」が、具体的に述べられている。特別活動では、学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事の「1. 目標」において、「望ましい人間関係を形成すること」を体験的にまた異学年集団による交流の必要性も述べられている。平成23年度より実施予定の外国語活動では、「第1. 目標」において、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(中略)コミュニケーション能力の素地を養う」と交流について“コミュニケーション”という言葉が用いられている。

(2)「体験活動事例集」⁹⁾

本事例集は学校教育における体験活動の意義や効果的に実施するためのポイントと優れた実践事例を掲載したものである。「はじめに～体験のススメ」においては、「子どもが健やかに育っていく過程において、社会性は

人々とののかかわりの中から、意欲は物事に能動的・積極的に取り組む中から培われるものと言われます。(中略)子どもの社会性や意欲を育むためには、集団で活動する機会や自分の力で物事にに取り組む機会を提供することが欠かせません。」と体験活動を通じた地域の人々との交流や学校での集団での児童相互の交流の大切さが述べられている。「1. 体験活動を効果的に実施するために」の「1. 体験活動の教育的意義・体験活動について」での具体的な効果として、「⑥社会性や共に生きる力の育成」があげられ、「生きる力」を育むためには自然や社会の現実に触れる実際の体験活動の必要性が述べられている。さらに「同・体験活動の重要性について」においては、「(1)近年の子どもをめぐる課題」として、「教育課程における体験活動の充実が進められてきたところであるが、(中略)特に、人間関係をうまく作れない、集団生活に適応できない子どもの増加やいじめの陰湿化に代表される規範意識の低下、(後略)」があげられる。その例として「①自然や地域社会との深く関わる機会の減少」や「②集団活動の不足(『集団』から『個＝孤』へ)」のような状況が考えられている。また「(2)長期宿泊体験が有する意義」では、「①集団生活の中で協調性・自主性を育む」や「④幅広い年齢層との多様な交流の機会を得る」と期待される効果の事例も述べられている。

(3)「環境教育指導資料(小学校編)」⁹⁾

環境教育は学習指導要領で、総合的な学習の時間における国際理解、情報、福祉・健康などと同じく学習活動の課題の一つとしてあげられている。しかし、本指導資料では「環境教育を各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等の中で、それぞれの特性に応じ、また、相互に関連させながら学校教育全体の中で実施するようにしている」と述べられている。そのため教育課程において実施される環境教育を通して、体験活動による交流があげられている。そして、「第1章 環境教育と環境保全。2. 環境教育の背景となる考え方」において、「イ. 環境教育の内容」として、「人間と環境に関わりに関するものと、環境に関連する人間と人間との関わりに関するもの、その両方を学ぶことが大切であること」が述べられている。さらに、「第2章 小学校における環境教育、第1節 小学校における環境教育の推進、1. 小学校における環境教育の基本的な考え方」において、「環境教育で重視する能力と態度(例)」として、「合意を形成する態度すなわち、環境や環境問題について自分の考えや意見をもってそれを表現するとともに、相手の立場や考えを理解し、合意を形成しようとする態度が必要である」と述べられている。「同2. 小学校における環

境教育の指導上の留意事項」において、「(3)校種間の連携で進める環境教育」として、「①幼児教育との連携②中学校教育との連携③家庭や地域社会等との連携で進める環境教育」が、集团同士の交流に必要であると述べられている。

3. 体験学習による交流を深めるための取り組み

これまでに校種間の連携として、小学生と大学生の交流⁹⁾や中学生と高校生の交流⁷⁾、小学生と高校生の交流⁹⁾、また、学校と地域住民との連携として、小・中学生と地域NPOの交流⁹⁾、小学校の学年内での子ども同士の交流¹⁰⁾などの実践例があげられる。これらは主に自然観察や森林体験、河川浄化活動や街づくり活動、作物などの栽培活動などの体験学習を通して交流を深めることができたとされている。しかしながら、これらの評価については活動参加者の事後の様子や感想によるものが多く、

また、年間を通しての参加者の継続的な意識調査の実施や、取り組みの成果の検討が十分に行われていないのではないかと考えられる。研究を深めて行くために上記の実践例以外に次のような校内での異学年連携による小学生同士の交流についての実践を行った(表-1)。

(1) 校内での学年内の交流

本研究を進めていくために、1学期には第4学年の学級の枠を外し、8名を1つの班として7つの混合班の編成を行った。そして、地域や保護者の支援を得ながら班ごとに米やとうもろこし、大豆など様々な作物の栽培活動を行った。また、2学期には秋の作品展の作品として、淀川の葦を使った立体たこ作りや、作物を使った収穫祭などを、更には、3学期には淀川での野鳥観察会や葦の立体たこあげ大会の実施などを通して、4年生の児童どうしの交流を深めた。



図-1 地域の人々の協力による稲刈りの様子

(2) 異学年連携による交流や地域や保護者との交流

特別支援学級の児童とともに、前記の1・2学期の栽培活動や収穫祭を協力して進め交流を深めた。そして、「交流新聞」を定期的に発行し、特別支援学級の児童と交換したり、稲刈りの指導者として地域の敬老会の人々と、調理の支援者として保護者との交流も深めた(図-1・図-2)。



図-2 4年生とみどり学級との交流の様子

表-1 1年間の主な活動の内容

月	主な活動の内容
4月	総合的な学習の時間の主題と内容について児童と学級担任が共通理解を深める。
5月	学級の枠を外して、班を編成し、米の栽培活動を通し、学年内の交流活動始める
6月	4年生児童によるみどり学級(特別支援を受ける学級)への作物の栽培の支援を通して、交流活動始める。更に、枝豆(豆腐作り)・とうもろこし(ポップコーン作り)・サツマイモなどその他の作物の栽培活動始める。また、4年生児童を対象に交流活動についての意識調査を実施する。
7月	一学期に一度『交流新聞』作り始める。同時に、みどり学級(特別支援を受ける学級)や保護者にも配布を始め、交流を深める。
8月(夏休み)	グループにより定期的に作物の世話や観察活動を行う。
9月	栄養職員の指導により「天王寺かぶら」の栽培を始める。
10月	協力して稲刈りや大豆、ポップコーンの収穫をする。みどり学級主催お楽しみパーティーに4年生が参加する。
11月	作品展に出品の葦の立体たこ作りを協力して行う。
12月	4年生主催の玄米とポップコーンのパーティーにみどり学級を招待する。校内での授業研究で本学年の取り組みのポスター発表を行い、学習を4年同士で確かめ合う。二度目の交流活動についての意識調査を実施する。
1月	淀川河川敷での日本野鳥の会の協力による野鳥の観察会と葦の立体たこあげ大会を行う。
2月	天王寺かぶらなど栄養職員の協力により調理実習を行う。みどり学級を招待し、収穫した大豆で地域の方を講師に豆腐作りを行う。
3月	『交流新聞』をまとめ、児童を対象に三度目の交流活動についての意識調査を実施する。児童集会での取り組みの発表

4 交流に関する児童の意識調査

本研究を進めていくにあたり、児童を対象に次の三つの調査を行った。一つは4年生児童について学年内での交流について質問紙による意識調査を、学期末ごとに行った(図-3)。二つは「交流新聞」において、4年生児童による特別支援学級及び特別支援学級の児童への質問

記事の内容の変化を調べたものである(図-9・図-10)。三つは全校児童対象に行われた学校生活についての個人の達成度に関するものであり、他の二つのグラフとの比較により本研究の成果の検討を行うものである。

(1) 4年生児童の交流についての質問紙による意識調査

各学期末の6月、12月、3月に4年生児童55名～54

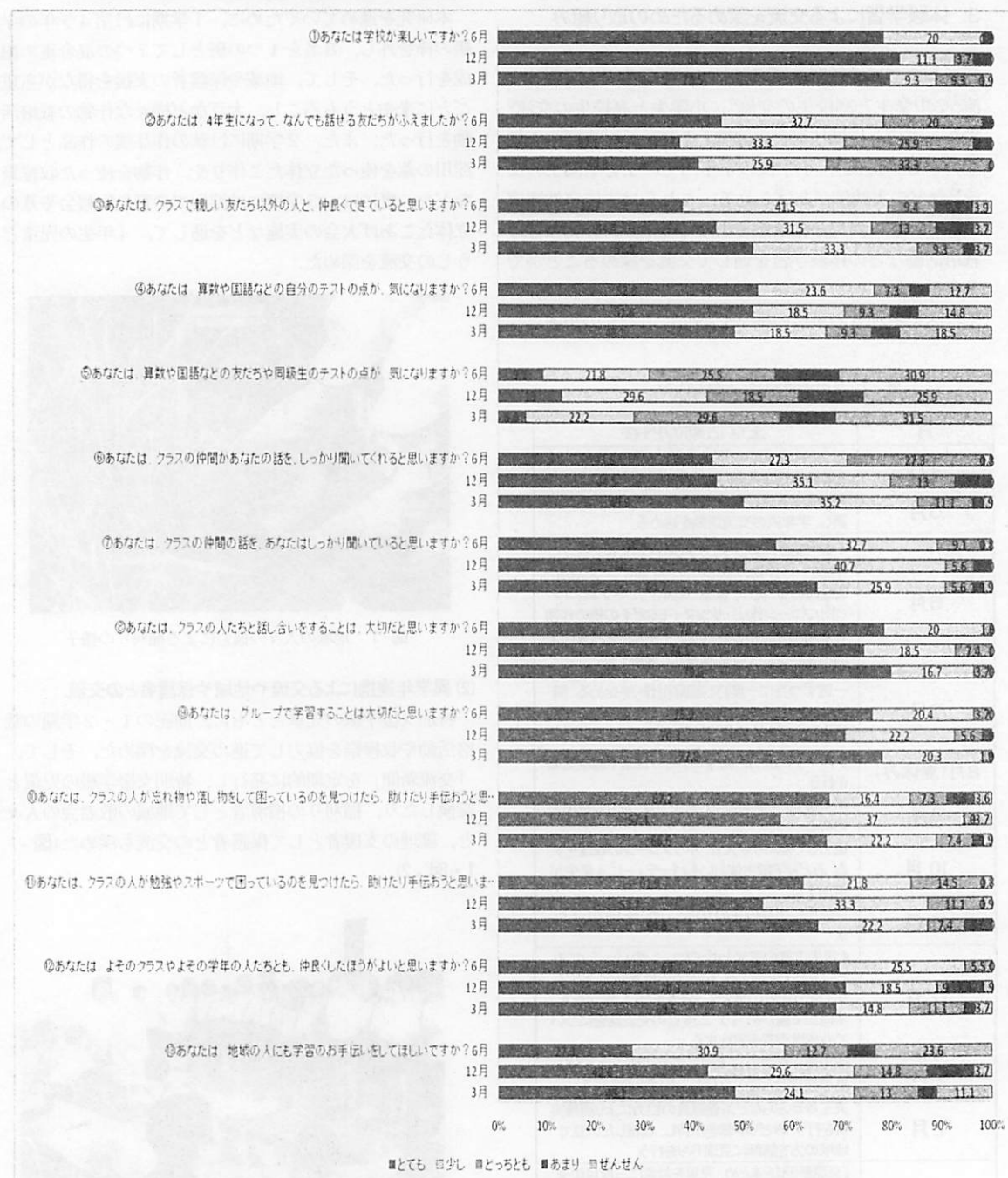


図-3 4年生児童の交流についての意識調査

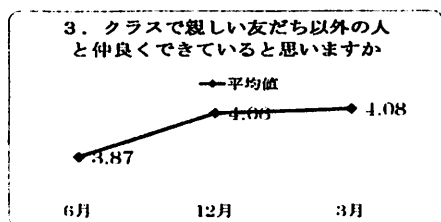


図-4 質問項目③の平均値の変化

名を対象に五者択一式と記述式による交流についての意識調査を行った。その結果、質問項目③「クラスで親しい友だち以外のひとと仲良くできていると思いますか？」については、「みんなと仲良くできるようになった」が

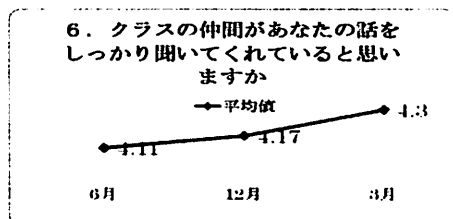


図-5 質問項目⑥の平均値の変化

主な理由で、また、質問項目⑥「クラスの仲間があなたの話をしっかり聞いてくれると思いますか？」については、「みんながきちんと聞いてくれるから」が主な理由で共に、「大いに思う」「少し思う」という回答がそれぞれ増加していることがわかった（図-4・図-5）。

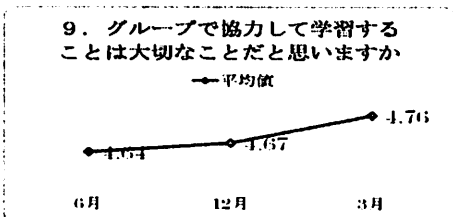


図-6 質問項目⑨の平均値の変化

質問項目⑨「あなたはグループで学習することは大切だと思いますか？」については、「協力し合うと学習が楽しいから」が主な理由で、わずかながらあるが学期ごとに平均値が増加していることがわかった（図-6）。また、

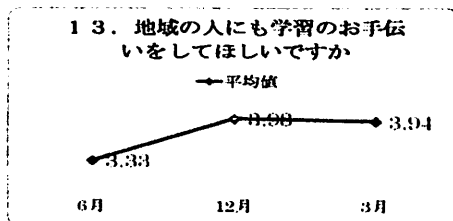


図-7 質問項目⑬の平均値の変化

質問項目⑬の「あなたは地域の人にも学習のお手伝いをしてほしいですか？」については、「いろいろなことが聞けるから、地域の人との交流は楽しいから」が主な理由で、平均値が1学期に比べ3学期が大きく増加していることがわかった（図-7）。しかし、質問項目⑯の

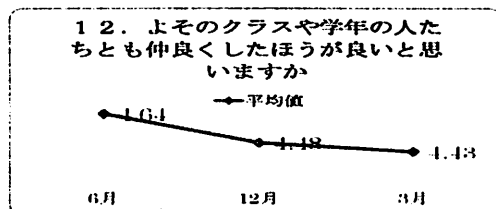


図-8 質問項目⑫の平均値の変化

「あなたはよそのクラスや学年の人たちとも仲良くしたほうが良いと思いますか？」については、「やってみることがないから、よくわからない」が主な理由で、わずかながら平均値の減少傾向が見られた（図-8）。

(2) 4年生児童の「交流新聞」による意識調査

児童手作りの「交流新聞」に書かれている『みどり学級へ教えてほしい人や物、こと』という質問のコーナーでの記事の内容を調べることにより、4年生児童の交流についての意識の変化を調べた。その結果、記事（質問の内容）の傾向は「子どもの人数」の平均値及び「質問の種類ごとの総数」の平均値については、9月から正月

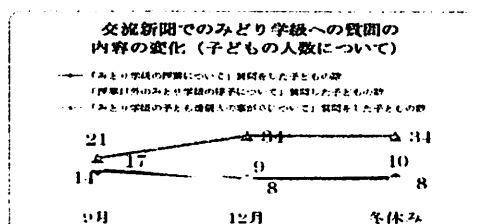


図-9 質問の内容の変化（子どもの人数について）

（冬休み中）までの期間、「◆みどり学級での授業についての質問と、■授業以外のみどり学級についての様子の質問」は減少傾向か、または変化が見られなかった。しかし、「▲みどり学級の子もたち個人の事柄についての質問」は増加傾向が見られた（図-9・図-10）。

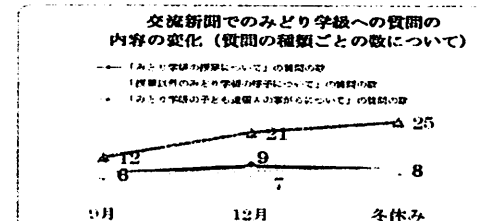


図-10 質問の内容の変化（質問の種類ごとの数について）

(3) 全校児童対象の「学校生活についての調査」による検討

本調査は「1. 学校は楽しいですか?」「2. 学習は楽しいですか?」「3. 仲の良い友だちはいますか?」など子どもたちの学校での生活についての質問に、「はい・どちらでも・いいえ」の三者択一式と記述式により回答するものである。その結果、「5. 地域(校外)に出かけたり、地域の人に教えてもらったりする学習は好きですか?」については、4年生が最も「はい」が多いことがわかった。「地域の人に教えてもらうのは楽しいから、自分が知らないことをいっぱい学べるから」など4年生児童の交流についての質問紙による意識調査と同様の理由があげられていることがわかった(図-11)。

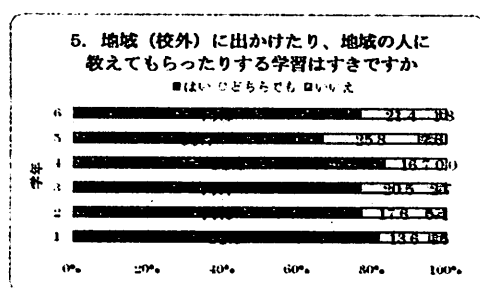


図-11 学校生活についての意識調査の結果

5. 取り組みを終えて

本研究では前回(2004年度)の取り組みの課題解決を目指した。その結果、他学年の児童との交流や、年間を通しての計画的な体験的な学習の実施、「交流新聞」による評価方法の工夫などにより、児童同士の交流が深まったことが考えられる。また、4年生児童による授業研究会でのポスター発表会への参加や、児童集会での全

校児童への学年交流の紹介などにより、さらに他学年児童や多くの職員、地域、保護者に理解され、異学年交流が校内で広まりつつある。そしてこれからは、体験学習と同様に、様々な人々との交流を大切にする視点で、教材作りや教育課程の編成が行われるべきと考える。

参考文献

- 1) 太田 肇著：囲い込み症候群—会社・学校・地域の組織病理—ちくま新書, 2001.
- 2) 第15期中央教育審議会第1次答申, 平成8年7月
- 3) 文部科学省, 小学校学習指導要領, 平成20年3月告示
- 4) 文部科学省中等教育局児童生徒課作成担当, 監修: 宮川八岐, 体験活動事例集—体験のススメ—[平成17・18年度豊かな体験推進事業より], 平成20年1月
- 5) 国立教育政策研究所教育課程研究センター, 環境教育指導資料(小学校編), 東洋館出版, 平成19年9月30日
- 6) 野村香奈子・笹谷康之・出羽浩明: WebGISとその出力図を活用した環境学習の研究—朱雀第三小学校を事例として—, 環境システム論文発表会講演集, Vol. 32, pp. 137 - 144, 2004.
- 7) 桑川高德・相原良孝: 「総合的な学習の時間」に対応した流域内学校間連携による河川浄化の試み, 環境システム論文発表会講演集, Vol. 30, pp. 175 - 180, 2002.
- 8) 大阪市教育センター教育振興室, 環境教育指導資料, 校舎屋上における稲作りと教室環境の改善, pp. 37-40, 平成18(2006)年
- 9) 古澤良彰: 小中学校における地域社会と連携を図った環境教育, 日本環境教育学会, Vol. 19, B104, 2008.
- 10) 拙稿: 地域のヨシを生かした体験学習とその教育的成果に関する研究—人と自然の関わりの理解を通して人同士の関わりの大切さに気づく学習—, 環境システム論文発表会講演集, Vol. 32, pp. 2109 - 304, 2004.

STUDY ON CONCERNING THE TEACHING MATERIAL MAKING TO DEEPEN THE EXCHANGE BETWEEN CHILDREN THROUGH THE ON-SITE TRAINING.

Akio DEN

Recently, various problems are seen with the change in living foreign-style by us in attempting communications (exchange) with the people other than me including the family. Children also include the difficulty of "Guidance of child's group (companion) making" by one of the problems of educational guidance regardless of the school year at the school life. This was made the deepen of the exchange of both groups through the studies such as cultivation, harvests, and cooking crops by cooperation with the child of the fourth grader and the special support class, and deepens of the exchange by the work making etc. that handled Yoshi only by the fourth grader by as many as the fourth grader in this research. The result was verified by "Exchange newspaper" that the child regularly made and "Questionnaire of the companion making". The accumulation of a continuous on-site training was clarified, and to deepen the child's result exchange, a positive, premeditated ..considered the child's exchange.. a teaching material making was clarified in the on-site training ..useful.. as the teaching material and it was clarified that it was necessary etc.